

播州加古川の舟運開發

川 名 登

要 旨

中国地方を南流して瀬戸内海に流出する加古川の舟運開發は、近世初期の文祿年間よりはじまり、これまで阿江与助および伝入斉によって実施されたと云われてきた。しかし、それは必ずしも正確でないことを明らかにした。また加古川舟運開發は、四つの区間に分けられて、下流より上流に向かって進められた。その過程で、当時の舟運路開削技術、操船技術等を知ることができた。

キーワード

加古川、舟運開發、阿江与助

目次

はじめに

一 瀧野―大門間水運路

二 大門―高砂間水運路

三 田高―瀧野間水運路

四 本郷―田高間水運路

まとめ

はじめに

加古川は、中国山地に源を発し、ほぼ直線に南下して、高砂湊で瀬戸内海に流出する。この川を横切って渡る渡船は、中世からあったことが知られているが、縦に走る水運は近世初期に阿江与助によってはじめて開発されたとされている。『明治以前・日本土木史』は、加古川中流の瀧野より川口の高砂湊に至る水運路について、次の如く記している。

「豊臣秀吉姫路在城の節、加東郡瀧野村河高の産阿江與助源正友が開発を願出で、文祿三年奉行生駒玄蕃頭の命を受け、私財を投じて瀧野より高砂港に至る間、数個所の巖石を開鑿し、浅瀬を浚渫し、舟筏航行の便を開きたり」

これは、阿江与助の水運路開発を簡明に述べているように思われる。ところがこれは、幕末期の阿江家由緒書等を見て書いたものと思われるが、これをそのまま全て事実として信ずることはできないのである。たとえば、第一行目に書かれている「豊臣秀吉の姫路在城」は、天正十二年頃までの天正期であり、この時期に与助が開発出願をしたとすれば、次に「文祿三年」とあるのは誤りとなる。また、生駒玄蕃頭が秀吉の奉行であったという証拠もない。

そこで先ず、この記事の検討から始めなければならないのであるが、現在、阿江家に残る文書の中には、幕末期の由緒書ばかりでなく、与助の水運路開発等に触れた文書が多数存在するので、これらを基礎として、近世初期の加古川水運路開発の全体像の再検討を試みてみたい。

また、加古川中流の瀧野村前の河中には、後に「閼龍灘」と呼ばれるようになる岩場が存在し、これを越えて船

を通すことは明治期に至るまでは不可能であった。そこで加古川の上流から下る船は、ここで船荷の積み替えをしていたので、加古川水運はこれを境として下流部と上流部との二つに大きく分けられていた。即ち、瀧野より河口の高砂湊に至る「瀧野川」と称された部分と、上流本郷より田高を経て瀧野に至る。「本郷川」「田高川」と呼ばれる部分とである。本稿ではこのような事実をふまえて、加古川水運を、幾つかの部分に分けて、検討してみたい。

一 瀧野―大門間水運路

前述の如く、阿江家に残る史料の中には、与助の水運路開発に触れた文書が多数見られる。それらの記事を、開発の時期、秀吉の姫路在城時か文禄三年か、生駒玄蕃頭は秀吉の奉行か、与助の開発は生駒の命によるのか、開発区間は瀧野―高砂か、等々の視点に立って表にまとめたものが表1である。

これを見ると、開発時期を秀吉の姫路在城時として、生駒を秀吉の奉行とする記事は、幕末の万延、文久期に至って初めて現われる。それに対して、開発時期を文禄三年或いは文禄年間とする記事は、それ以前から多数みられる。後述の如く開発時期は文禄年間と考えられるので、秀吉姫路在城時や生駒氏の秀吉奉行という記事はおそらく誤りであろう。

この万延、文久期の文書では、開発主を殆どの文書が、「与助」とするのに対し、「阿江与左衛門」としている。開発主を「与左衛門」とする文書は、これ以前では享保四年に一点のみ見られるが、その理由は明らかでない。

また、正徳・享保期の文書に始めて現われる「姫路御地頭」とは、姫路藩主を指するものであり、文禄期の姫路

城主は木下家定であつたと思われ、これも誤りであろう。

生駒玄蕃頭の肩書きは、近世初期の文書から「御地頭」とするものが多い。文祿期には瀧野村の領主であつたことも考えられる。

水運路開発の区間については、天和・貞享期の文書以降は殆んど瀧野―高砂間を与助一人で実施したとしている。しかし、それ以前の寛文・延宝期に与助を「曾祖父」と呼ぶ九郎兵衛が書いた文書⁽²⁾では異なっている。即ち、

「高砂々加東郡大門村迄航路、印南郡之内磯部村彦兵衛、加東郡垂井村三郎右衛門と申もの、川を切明、舟通シ申ニ付」

とあり、また、

「私曾祖父上瀧野村庄屋与助と申もの被仰付、大門村々瀧野村迄川ヲ切明、舟入申候ニ付」

とあつて、大門村より高砂湊までは磯部村彦兵衛と垂井村三郎右衛門が水運路開発を行ない、瀧野村より大門村までを与助が担当したとしている。これは、与助を「祖父」と呼ぶ九郎太夫の書いた文書⁽³⁾でも同じである。

この九郎大夫の書いた正保三年の文書で、特に注目すべき所は、開発時期を「大閣様御代」としただけで、「文祿三年」という具体的な年号を書いていない点と、大門村より下流の彦兵衛、三郎右衛門の開発と、項を改めて瀧野―大門間の開発を書き、この両者の間に時差があつたように読みとれる点である。

寛文八年に与助の曾孫に当る九郎兵衛の書いた文書⁽⁴⁾から、何故か「文祿三年」という年号が登場し、その後明治期まで長く踏襲されるのであるが、与助が行なつた開発は、大門村より下流の舟運の成立を見てから、開始されたのではないかと思われる。

加古川中流、瀧野村以下の水運開発に触れた文書を年代順に並べてみると(表1)、その記事は年代が下がるに

記事一覧

高砂—瀧野	開発主	筆者	依 拠 史 料 名
与助			
	祖父与助	九郎大夫	新町より種々新法仕候ニ付先規ノ有来候通御理り申上候条々
	曾祖父与助	九郎兵衛	覚、
	庄屋与助	九郎兵衛	覚、
	曾祖父与助	九郎兵衛	覚、
○	先祖与助	九郎兵衛	覚、
○	先祖与助	九郎兵衛	乍恐口上書を以申上候
○	先祖与助	九郎兵衛	瀧野村高瀬舟之始り由来書
	先祖与助	九郎兵衛	覚、
	先祖与助	九郎兵衛	乍恐御断奉申上候御事
	与左エ門	手代惣左エ門	乍恐謹而奉言上仕候返答書
	先祖与助	九郎兵衛	覚、
	先祖与助	九郎大夫	御尋被為遊乍恐言上仕候
	先祖与助	九郎大夫	乍恐口上
	先祖与助	九郎大夫	覚、
	先祖与助	九郎大夫	瀧野川船座由緒
	先祖与助	九郎大夫	田高川高瀬船座之儀ニ付御尋被為成口上之覚
	大庄屋先祖	町野角大夫	両船座共銘々役人吟味仕左ニ申上候
○	先祖与助	九郎大夫	播州加東郡滝野川船座由来書
	先祖与助	九郎大夫	滝野村船座由来書
○	先祖与助	大庄屋吉蔵	播州加東郡滝野川船座由来
	先祖与助	不 明	播州瀧野村高瀬船初り并住古ノ船座由緒書
	先祖与助	九郎兵衛	瀧野川高瀬船初り船座由緒并證拠一札之写シ書上
	先祖与助	不 明	(口上書)
○	先祖之者	九郎兵衛	瀧野川船座御運上由来書、
	先祖与助	九郎兵衛	乍恐書付ヲ以奉申上候口上、
○	阿江与左エ門	赤松重寿	御運上銀納御印證
○	阿江与左エ門	九郎兵衛	由緒書
○	阿江与輔	九郎兵衛	由緒書
○	先祖与助	九郎兵衛	乍恐以書附由緒奉申上候

表 1 瀧野川開発

年月日	記 載	太 閤 代	文 祿 3 年	地 頭	生駒玄蕃頭の命	高砂一大門	大門一瀧野
						彦兵衛、三郎右エ門	与助
正 保 3. 8.26		○		○	○	○	○
寛 文 8. 4.20		○	○	○	○	○	○
延 宝 3. 4		○	○	○	○	○	○
延 宝 7. 3		○	○	○	○	○	○
天 和 2. 8		○	○	○	○		
貞 享 2. 4			○	○	○		
貞 享 4. 2			○	○	○		
(宝永 4.) 8			○	○	○		
正 徳 5. 6			文祿年中	姫路御地頭	○		
享 保 4. 6.18			○	姫路御奉行	○		
享 保 5.12			○	姫路御地頭	願申上		
享 保15. 5			○	○	○		
享 保15. 6.24			○				
享 保17. 5			○				
元 文 5. 1			○				
元 文 5. 1			○	○	○		
元 文 5. 3			文祿年中				
寛 保 1.11			○	○	○		
寛 保 2			○	○	○		
寛 延 2			○	○	○		
(寛延 2)			○	○	○		
(安永 2)			○	○	○		
享 和 1. 6			○	○	○		
文 化 2. 2					念願		
文 政 3. 8			○				
万 延 1.11	姫路御在城		○	御奉行	○		
文 久 2. 2	姫路御在城		○	御奉行	○		
不 明	姫路御在城		○	御奉行	○		
明 治 2. 2.19	○		○	姫路御地頭	願上、○		

○印一記載アリ

従つて誤りが多くなるように思われる。それ故か最近の研究では、幕末期の由緒書等を使うのではなく、最も古い、即ち与助の開発時点に最も近いと思われる正保三年の文書⁽⁶⁾を基礎にするようになった。

ところが、この正保三年の文書よりなお古いと思われる「覚書」⁽⁷⁾が、阿江家文書の中に存在するのである。これには年月日もなく、それも後の写なので誤読、誤写も多く意味不明の箇所もあるのであるが、その中にはこれ迄の文書には見られない興味深い記事が散見するので、これを基として舟運開発を考えてみたい。

まず「覚書」を見ると、最初の表題は無いのであるが、その末尾には次の如く記されている。

「同^(元和) 七年酉^ノ瀧野荷物運上ニ被成、唯今ニ瀧野村九郎兵衛相勤申候」

この文中に現れる「九郎兵衛」は、正保三年の文書を書いた九郎大夫の親であり、与助の長男である。それ故、この「覚書」は元和末年から寛永初年頃に書かれたものと思われる。

「覚書」の最初は、瀧野村から三木城にかけての地域の、元亀^ノ天正頃の諸豪族、土豪層の争乱を記し、そこに秀吉の勢力がのびてきて三木城主は秀吉の臣・中川右衛門大夫秀政となり、瀧野村もその領地となるが、秀政は朝鮮出兵中に戦死するとある。これに続いて、「其後伏見ニ有^テ生駒玄蕃殿領ニナル」とあつて、文祿期に生駒玄蕃の領地となったという。この記憶が、その後長く「御地頭、生駒玄蕃頭様」と記される基となったのであろう。

この記事に続いて、「文録^(マ)元ヨリ慶長之始、為年貢薪等歩持、塩市村持運、今市村与兵衛へ渡シ伏見送上」とある。即ち、文祿、慶長期には年貢としての薪等を、今市村の与兵衛を通して伏見に送っている。この頃、加古川の川口はまだ高砂ではなく今市にあり、今市は瀬戸内廻船の湊であつた。⁽⁸⁾与兵衛はおそらく今市の廻船問屋でもある

うか。この今市まで塩市村を經由して年貢等を陸送している。この時、「磯部村彦兵衛、垂井村三郎右衛門、平田船作川筋荷物自由スル事、与兵衛語申三」と、おそらく年貢納入責任者であつたと思われる磯部村彦兵衛と垂井村三郎右衛門に、陸送ではなく平田船を作つて、加古川筋で荷物を自由に輸送する事を与兵衛が提案したという。

「爰ニ瀧野村公文屋敷阿江左兵衛佐与申古武士、三草村ノ塩市、村ニ立所ナレハ、往来之川越之渡し船作り所持ス、此船を借り、薪十荷積三人シテ今市へ乗下り、磯部、垂井、今市ト申合、平田船調へ、伏見へ用事ヲ調、是文録^(ママ)四迄」

そこで、彦兵衛、三郎右衛門、与兵衛の三人は、瀧野村公文屋敷に住む阿江左兵衛の持つ渡船を借り、薪十荷を積んで、おそらく垂井村からであろうが今市まで乗り下つた。この試験航行は成功したのであらう。その後この三人は平田船を作り、加古川水運による伏見への年貢等の輸送を行つた。それは文祿四年までであつたという。

「扱、右左兵衛末与助、岩ノ舟通ヲ垂井村迄切明ケ、完栗川ノ高瀬船ヲ買廻シ、近辺諸荷物下シ、瀧野村与助、利兵衛、六右衛門高瀬船持初、荷物有之候」

いよいよ阿江与助の登場である。おそらく垂井村より下流の舟運の盛況を見た与助は、瀧野村より垂井までの舟運開設を考えた。しかし、その間には岩場があり、簡単には通船できなかった。そこで所々の岩の間に舟通しを切り明ける開削工事を実施した。これが後々まで瀧野川の水運路開発として人々に記憶されたものであらう。この工事を完成させた与助は、「完栗川ノ高瀬船ヲ買廻シ」と「完栗川」即ち揖保川の高瀬船を買つて廻送している。これが加古川に高瀬船が浮んだ最初であつたと思われ、揖保川からの水運技術の導入が考えられる。与助は、この高瀬船によつて近隣諸村から出る諸産物・荷物を下流地域に積み下した。この頃、瀧野村で高瀬船を持つ者は、与助

の他に利兵衛、六右衛門がいたという。

これが、「覚書」にみる加古川水運路開発への動きであるが、ここには注目すべき点が幾つかみられる。まず第一に、加古川下流の水運は、年貢輸送を目的として始まったということ、その主体は河口湊である今市の与兵衛と年貢納入の責任を負う磯部村、垂井村の土豪層と思われる二人とであったことである。次に、加古川に初めて浮んだ川船は「平田船」であり、その後「高瀬船」が導入されたこと。また、阿江与助の実施した通船路開発は、瀧野村より垂井村の区間であり、今市村与兵衛等三人が行った垂井より下流の通船では、舟通切明け等の記事が見えないところから、川中の開削工事等は殆ど不要であり、川船を調達さえすれば通船は可能であったと思われる点である。また、今市村与兵衛等が行なった通船事業と、阿江与助の実施した舟運路開削工事との間には、わずかながらも時間的差があったと読める点である。それ故、阿江与助の実施した工事は、文祿四年以降ではなかったかと思われる。

この後の正保三年の文書以降、与助の舟運路開発の区間は、瀧野村より大門村までと記されるようになる。その理由は明らかではないが、ただこの「覚書」に、（慶長九年）「此年、二見村藤左衛門、分一物ヲ運上ニシテ、大門村迄改」とある。この文意は十分には明らかではないが、おそらく二見村の藤左衛門が運上金上納を条件に、大門村より下流の通航権を握り、瀧野村の権限は大門村までとなったのではなからうか。与助の実施した開削工事区域もこの大門村までの区間内にあったのだろう。このことが、大門村を境とする思考に繋がったのではないかと思われる。

また、与助の水運開発が、生駒玄蕃頭の命によるという記事はこの「覚書」ではどこにも出てこない。おそらく与助の開発を権威付けるために、後になって書き加えたものであろう。領主としての生駒氏に舟運開発の許可を求

めたことは考えられるが、積極的に生駒氏が舟運開発を命じたとは考えられない。それは、与助が高瀬船によって最初に積み下した荷物は、「近辺諸荷物」や多可郡よりの荷物であって、生駒氏の年貢米等ではなかったからである。

与助の長男である九郎兵衛の代に書かれたと思われる「覚書」をもとにして、瀧野川舟運路開発を見てきたが、与助の実施した開削工事の実態については、殆んど知る事ができなかった。それはむしろ後述の田高川の開削工事の実態から、同様なものとして推測することとしたい。

次に、この水運路開発が河川水運の独占的な特権（船座）となり、後に引継がれていく過程を簡単に見ておきたい。

瀧野川では、文祿期の与助の開発以後、領主による運上金等の賦課や、それにとまなう水運の独占的特権の成立があつたかどうか明らかでない。しかし、前途の「覚書」には瀧野村より上流の田高川の運上に付いては記しながら、元和以前の瀧野川については全く触れていないことから、これ以前にはなかったと思われる。はじめて記されるのは「元和三年巳年本多忠政公御入部、同七年酉々瀧野荷物運上ニ被成」という記事からである。

元和三年、姫路城には池田氏に代つて本多美濃守忠政が入部し、瀧野村も田高村もその領地となつた。そして元和七年、本多氏への出入商人で大坂の蔵本を勤める橋本浄全等の願により、瀧野川水運は田高川水運と共に「舟扮御運上」場とされたのである。即ちこれは、水運を独占し、川船の積荷から運上金等を徴収して領主への上納を請負う、後に「船座」と呼ばれるものの成立である。

この時の請負人は、大坂町人橋本浄全と姫路の左兵衛、神吉の九兵衛の三名であつた。⁽¹¹⁾しかし、この橋本浄全等

による請負は三年間で終り、元和九年三月からは再び田高村の船持と瀧野村九郎兵衛の請負となった。⁽¹²⁾ この時の運上金額は「銀三貫目」で、その内「壹貫目者瀧野ニて米やと仕候運上」⁽¹³⁾で瀧野村九郎兵衛が負担し、「壹貫目者多可郡田高村川なミノ運上」で田高村伝入齊が負担した。残りの壹貫目は「加東郡へ方々出ルすミ木万五分一之運上」とあるように、⁽¹⁴⁾「五分一運上」と呼ばれるもので、課税の対象は「川筋江出申候炭・抹香・薪・惣而山荷物」⁽¹⁵⁾であつた。これは「相御運上」と云われるように、瀧野と田高共同の請負で、具体的には瀧野村で徴収して両方へ配分し、それぞれより半額を上納した。

その後寛永八年に姫路城主が本多甲斐守政朝に代ると、田高村は政朝の子本多内記政勝の領地となり、運上等は内記へ上納し、瀧野村は引続き政朝領であつたので、それぞれ納入先が別れた。⁽¹⁶⁾

次いで寛永十一年、瀧野川・田高川の運上座とも、本多氏より「御扶持被遣候町人」⁽¹⁷⁾といわれる江戸の御用商人・渡部忠八の請負となった。⁽¹⁸⁾

そして寛永十六年、本多氏が移封となり、代つて松平下総守忠明が姫路に入部すると、渡部忠八の請負は終り、再び両舟座は地元の請負に戻つた。

この時、田高村は天領となつたが、姫路藩領に残つた瀧野村では、その後の天和二年、本多中務大輔忠国⁽¹⁹⁾の入部により貞享二年四月から渡部忠八の子孫に当る「御普代町人」渡部五郎八が、「先祖忠八相勤候例ニ而被仰付」と、先祖の勤めた先例により瀧野川船座を請負うこととなる。これは宝永元年の本多氏の移封まで続いたが、その後は瀧野村の阿江家の請負は変わらず、明治の船座廃止まで継続した。

二 大門―高砂間水運路

垂井・大門村辺より下流の水運は、前述の如く今市村与兵衛・磯部村彦兵衛・垂井村三郎右衛門によつて文祿期から開始された。

その後慶長九年に、前述の二見村の藤左衛門が運上金上納を条件に、大門村より下流の通船権を握つたと思われるが、その内容はあまり明らかではない。

しかしこれが、下流地域における水運特権成立の最初である。その後これがどの様に引継がれていったか不明であるが、寛永期になると粟生村の八兵衛が現われる。

「来住村々上そかい村の間、方々より出申候諸商人荷物ハ不及申、御公儀御荷物共舟さはき、粟生村八兵衛ニ被仰付候」⁽²⁰⁾

とある如く、大門村対岸の上曾我井村より来住村までの間の全ての荷物の「舟さはき（舟捌）」を粟生村八兵衛が独占した。

「如何様之荷物ニても舟ニ積申物ハ、八兵衛ニ断申筈ニ候間、若商人などハ様子存間敷間、其荷物出申湊より商人ニ様子申聞、八兵衛方へ舟之かつてんさせ、八兵衛指図之舟ニ積セ申様ニ可被仕候」⁽²¹⁾

と代官より各村々へ達している。即ち、「粟生村船座」の成立である。これを記した文書には年号が記されていないが、差出人の一人である井川加兵衛は、寛永十六年に姫路に入部した松平下総守忠明の代官で寛永期より活動している⁽²²⁾ので、粟生船座の成立は、瀧野川・田高川船座の請負が地元に戻つた寛永十六年であつた可能性がある。

その時の請負運上額は、「銀六拾目」であつたとも云われるが、明らかではない。⁽²³⁾その後、この粟生船座は上曾我井村より下流の加古川の西岸に沿った村々を、独占的な「船捌場」として、その権限は下流の下来住村まで及んだ。⁽²⁴⁾

この粟生村の対岸である加古川東岸は、粟生村船座に宛てた太郎太夫村船持惣代の一札に、⁽²⁵⁾「古来より貴殿川西岸、我等方は東岸支配致来り候」とある如く、「船捌」は万勝寺川の合流点にあつた太郎太夫村の権限であつたようである、ここにも太郎太夫村を中心とする「船座」の成立が考えられる。⁽²⁶⁾

これより下流には、船頭村がある。正徳五年に船頭村船持の出した「口上覚」⁽²⁷⁾には、

「東八同領加古郡大野村より高砂迄、西は同領印南郡池尻村より荒井村・魚崎村迄之内、村々多く御座候得共、井堰船・横渡船より外は為持不申候」

とあつて、船頭村は沿岸村々に渡船等以外の荷船の所有を禁じ、荷物輸送を独占している。加古川の東岸を大野村より高砂まで、西岸を池尻村より魚崎まででは、加古川の最下流域を殆んど含んでおり、ここにも水運の独占的権域が成立していたのである。

三 田高―瀧野間水運路

瀧野村より上流の、田高村までの水運路については、前掲の「明治以前・日本土木史」は、次の如く記してい

る。

「瀧野より多可郡黒田庄村に至る田高川（現称加古川）は、瀧野川と同じく巖石介在し、舟筏の航路に適せざりしが、慶長九甲辰年姫路城主池田三左衛門輝政より、開発の命を承け、巖石を開鑿し、浅瀬を浚渫し、舟筏航通の便を開始したり。」

これには、開発主体について書かれていないが、この記事の元となったと思われる幕末期・文久二年の阿江家「由緒書」⁽²⁸⁾には、

田高川開発之事

一田高川茂同様、岩石多通船不相成候ニ付、瀧野川開発之引続を以、慶長九甲辰年姫路御城主從 池田三左衛門様阿江與輔并田高村伝入齊兩人江開発被為 仰付候ニ付、所々岩石切開、難瀬掘浚、川瀧敷板等相用ひ、通船航筏ヲ乗下ケ候様相成候ニ付、為御褒美伝入齊江船座被為 仰付、開発之依由緒、田高座々積下ケ候諸荷物、当船座付ニ相究候

とあつて、瀧野川水運路の開発に引続き、慶長九年に姫路城主池田三左衛門の命により阿江与輔及び田高村の伝入齊の二名が田高川の開削工事等を行つて、水運路を開いた。その褒美として伝入齊は船座の権利を得、与輔は田高辺より積下る諸荷物を一手に引受けるようになったという。

しかし、この「由緒書」の記事は、前項でも検討した如く、全てが正しいとは云えないのである。そこで、開発時に最も近い文書を基にして再検討してみよう。

前掲の最も古いと思われる「覚書」には、

「慶長九ニ田高川船道ヲ切、高瀬船遣イ初」

とあつて、慶長九年に田高川の開發が始つた事を記している。これ以後の田高川開發を記した文書も、全て幕末のものに至るまで「慶長九年」としている。文祿末から慶長初年の瀧野川の通船の成功を見た上でこの開發事業は開始されたと思われるので、開發開始の年代として「慶長九年」は妥當な年と思われる。

「覺書」に次いで、田高川の開發について記した最も古い文書は、明暦三年の「乍恐言上」⁽²⁹⁾である。これは田高川開發に係わつたと云われる伝入齊の子か孫と思われる舟町新田の伝左衛門他四名によつて書かれたもので、次の如く記されている。

「田高舟町高瀬舟之始り、慶長九年 池田三左衛門様御知行之時、御家来中村主殿頭殿へ言上仕、御證文致頂載、

川筋普請仕候」

即ち、「田高舟町高瀬舟」の始りは、慶長九年に当時領主であつた姫路城主池田輝政の家臣・中村主殿頭へ願ひ出て、その許可証を得て「川筋普請」を開始したのである。

後の幕末期の由緒書等に、この開發が池田三左衛門の命によるとあるのは誤りで、開發を權威付けるために後に書き替へたものであらう。

この文書「乍恐言上」は、これに続いて田高川開削の具体的な様子を次の如く記していて興味深い。

「舟町々瀧野村迄舟路切明、津万瀧四百間余、野村瀧五百間余も大なめらニ舟み^テ切明、其外所々之岩を慶長九年々同拾一年九月迄、舟持中として石切をやとひ、のミつちけんのう諸道具相調、加数人普請仕候得共、すぎと相済不申候ニ付、主殿頭殿へ申上候得ハ、今迄造作苦身仕候義不便ニ候間、石切之上手御借し可被成と被仰

候ニ付、則申請、石切衆扶持方諸道具^己下大分銀子を出シ、慶長拾一年十月迄^三両瀧其外普請出来仕、津万瀧舟路を横壱間半、長サ拾八間、岩を切、板を敷、就夫舟上下仕候ニ付」

即ち、田高川の開削工事の中心は、「津万瀧」（津万地先の川中の岩場を瀧と呼ぶのであろう）と「野村瀧」にあり、「津万瀧」は長さ四百間余、「野村瀧」は五百間余もあり、そこに「大なめらニ舟ミチヲ切明」と、船がスムーズに通れるだけの通路を切り開くのである。そのためには「石切」の工夫を雇い、鑿、槌、玄翁等の諸道具を用意し、人数を動員して、慶長九年より工事を開始して、翌慶長十一年九月まで続行した。しかし「すぎと相済不申」とあるように、簡単には成功しなかった。そこでこの様子を中村主殿頭に申上げたところ、これ迄苦心して工事を進めて来たのに不成功では不憫であるので、「石切之上手」（高度の技術を持つ石切の集団であらう）を貸してやろうと云ったという。そこでこれを借請けることとしたが、この「石切衆」への扶持や諸道具の用意で「大分銀子を出し」と、多くの出費を負担しなければならなかった。しかし、これによって慶長十一年十月（十一月ともある³⁰）までに、両瀧の工事が完成したという。津万瀧に造られた「舟路」（通船路）の中心部は、横巾一間半、長さ十八間の所を岩を切り開き、水底に板を敷き、その上を舟を上下させたという。

これによって、当時の河川開削技術や通船方法等を知ることができるのであるが、それにしてもこの文書の開削記事は、非常に具体的である。書かれた時期が開発時からわずか五十数年後であるので、当時を知る者が存在する可能性があったであろうか。

しかし、この文書には幾つか注目すべき点がある。その一つは開発主体についてであるが、幕末期の阿江家「由緒書」等にある「阿江与助」や「伝入斉」という名はどこにも見られない。伝入斉の子孫と思われる人物が書いた本文書に於てである。この中で、「石切衆」（開削技術集団）を雇って開発を推進したのは、「舟持中として」とあ

るように、田高村を中心とする「舟持中」であつた。勿論「舟持」は、舟運路開発以前には存在しないのであり、後に舟持となる村落内の有力農民層を指すものであろう。その代表者が「伝入齊」であつたのかもしれない。

慶長十一年末までに工事が完成し、通船が可能となると、翌慶長十二年から姫路藩は通船の権利を与えると共に運上金を課した。これが後に「船座」と云われるものである。前述の「覚書」には、

「慶長十二、田高川運上ニナル」

とある。この明暦三年の文書⁽³¹⁾には、

「右、川なミ為御運上、三左衛門様御知行之時分々、銀子拾五枚ツ、指上ケ申候」

とあつて、慶長十二年より始まる田高川の運上金額が「銀子拾五枚」であつたことが知られる。この運上金の納入責任者の代表が、「伝入齊」であつたのであろう。しかし、田高川開発に対する阿江与助の関与は、情報提供等は考えられるが、積極的な投資等は無かつたであらう。それは、田高川を積み下る諸荷物を瀧野村等の船が一手に積み請けることは、自然的条件等からみて当然の事であり、特に大きな権限とは考えられないからである。

次に、注目すべき点は、田高川開発の範囲である。前述の文書に、「舟町々瀧野村迄、舟路切明」とあつて、この時の田高川開発の対象は、明らかに田高舟町より瀧野村までであつた。即ち、舟町より上流の、本郷村までの水運路は、この時点ではまだ開発されていない事を確認しておきたい。

田高川開削工事の完成後、田高村の内の川附の地に、川の湊として新田集落が作られた。これが「舟町新田」である。前述の文書には、

「田高村之内芝原ヲおこし、高三拾六石式斗五升ニ御定被成、定免拾四石八斗七升四合、年々御上納仕来候」

とあつて、田高村の内の芝原を開発し、検地を受けて村高は三十六石余と決まり、年々定免の年貢として十四石余を上納したという。恐らく殆んどが屋敷地であつたのであろう。明暦三年には、家数三十軒余もあり、住人の殆んどが「舟持・加子之者共」であつたという。これが田高川水運の拠点となつた「舟町」の成立である。

田高川水運路開発に関して記した最も古い文書等によつて検討したが、それをまとめると、田高川の開発は慶長九年に開始され、田高舟町より瀧野村までの区間を対象とする開削工事は、慶長十一年十月或いは十一月までに完成した。翌十二年には領主である姫路城主池田氏より水運の特権が認められると共に運上金が課せられた。これが、後に「田高川船座」と呼ばれるものの発端である。この開発の主体は一個人ではなく、後に船持となる有力農民層であり、領主に出願して許可を得、領主側の協力もあつたが多くの出資をして完成させた。その後、田高村内の川附きの地に舟町を開発し、ここを田高川水運の拠点としたのであつた。

また、下流の瀧野川開発では明らかでなかつた開削工事や通船技術について、より明らかになつた事は、近世初期の水運路開発を考える上で、貴重な史料となろう。

こうして成立した田高川舟運は、その後元和三年、姫路が本多美濃守忠政領となると、元和七年より瀧野川と共に大坂商人橋本淨全等三人の請負となつた。これが「田高船座」の成立である。しかし、淨全等の請負は三ヶ年で終り、元和九年には再び地元請となり、恐らく田高村船持の代表と思われる伝入斉の請負となつた。⁽³²⁾この時の請負運上額は「田高村川なミノ運上」銀一貫目と、山方から出る炭薪等の山荷物にかかる「五分一運上」銀一貫目で、これは瀧野との共同請負で半額を負担した。次いで寛永三年、本多政朝が姫路に移ると、寛永八年からは政朝の子内記政勝が分封され、田高村はその領地となつたので、運上銀は内記方へ上納したという。しかし、寛永十一年、

領内の座を御用商人渡部忠八が請負うこととなり、田高船座も渡部忠八の請負となった。

その後、寛永十六年に本多氏が転封となり、船座はまたまた地元請に戻った。この時、田高村は姫路領を離れて天領となったので、運上銀は代官所へ納入した。その後この船座請負は、五ヶ年季、七ヶ年季等で請負人は変っていった。

四 本郷―田高間水運路

田高村より上流、本郷村までの本郷川水運路については、誰が何時に開発したか、これ迄に見えている文書の中には殆んど記されておらず、全く不明である。しかし、明暦三年の文書³³に、

「丹波本郷川之御運上、貳貫目之所、藤林市兵衛様・小野喜左衛門様へ御断申上候得ハ、卯年々壹貫目御引被成被遣候」

とある。これは慶安三年に、丹波・柏原藩主織田上野介信勝が死去して改易となり、藩領の大部分が天領となつて年貢米は地払いとなり、これまで毎年大坂に送っていた廻米荷物が本郷川に出なくなり、その事情を訴えて本郷川の運上金を慶安四年から半額の銀一貫目に引下げてもらったというのである。

この文書には、この記事に次いで、「其川下^二而、舟次を仕候舟町之義^ニ御座候得ハ」とあり、本郷川を下つてく

る諸荷物を受け、田高舟町で「舟次」（船荷の積み替え）をしていたことが知られる。

即ち、少なくとも慶安三年の段階で、本郷村より舟町までの本郷川水運は成立していたのであり、運上銀二貫目が上納されていたのである。これらより考えると、本郷川の水運路開発は、田高川水運の成立が前提であるので、慶長十二年より慶安三年の間にあることは確実で、開発主体は田高舟町の船持衆であったことも考えられるが、明らかではない。

まとめ

以上、多くの文書を対象として検討してきたが、加古川水運の成立には幾つかの段階があったことが明らかとなった。

第一は、最下流の垂井村辺より川口までの区間であり、今市・磯部・垂井の豪商農層によって通船が試みられ、最初の目的は年貢輸送であった。その区間では、川船と操船技術があれば、開削工事等は殆んど必要がなかったものと思われる。その時期は文祿年間であったと考えられる。

第二は、中流の瀧野村より垂井村辺までの区間で、文祿四年以後に瀧野村の土豪・阿江与助によって実施され、投資により川中の岩石を除去する開削工事等を伴うものであった。この開発の成功により、与助は後に「船座」

と呼ばれる水運の特権を持つと共に、運上金等を負担した。

第三は、田高舟町より瀧野村に至る田高川と呼ばれる区間で、田高村を中心とする「船持中」によって、慶長九年より開削工事等が開始され、慶長十一年末に完成する。これも、後に「船座」と呼ばれる水運の特権を握ると共に、運上金等を負担した。

第四は、田高川の上流、本郷村より田高舟町に至る本郷川と呼ばれる区間で、田高川水運の成立以後、即ち慶長十二年より慶安三年までの間に開発され、運上金を負担していたが、開発主体等は不明である。

このように、加古川水運は下流から上流に向って、四つの段階を経て成立したのであった。

註

(1) 加古川中流の新部村に、戦国末の天正期に渡船があつた事が、次の文書によつても知られる。

河井郷^{新部}しんへい村船頭四人三人夫令免除候之間可得其意也

九月五日 秀吉 (花押)

河井郷しんへい村

山田新介

(小野市・山田家文書)

(2) 寛文八年四月「覚」(瀧野町・阿江家文書)。以下特に記さない限り、文書は全て同・阿江家文書である。

(3) 正保三年八月「新町より種々新法仕候ニ付先規々有来候通御理り申上候条々」

(4) 註(2)に同じ。

(5) 八木哲浩「加古川の舟運」(『歴史の道調査報告書』第五集、平成七)。

(6) 註(3)に同じ。

(7) 文書の形態は一枚の折紙で、表題も無いので、ここでは仮に「覚書」と呼ぶこととする。

(8) 「加古郡今市と申所、海船之みなと、小堀遠州様之御代官所之時、御船場ニ被仰付候ニ付」(明暦三年十月「乍恐返答仕指上ケ申候」とある。

(9) 前掲「覚書」に、「近辺諸荷物下シ」とあり、正保三年の文書(註(3))にも「多哥郡々荷物を請取積下シ」とある。

(10) 前掲年不詳「覚書」。

(11) 本^(元)田 美濃守様姫路へ御入部之時、大坂橋本淨全・神吉九兵衛・姫路左兵衛三人として田高・瀧野両所ヲ銀四拾枚ニ御請仕」(明暦三年十月「乍恐返答仕指上ケ申候」とある。

(12) 「元和九年亥ノ三月より、多可郡舟町・加東郡瀧野村九郎兵衛立合之請所ニ被仰付」(正保三年八月「覚」)

(13) 後に「瀧野川舟座運上」とも呼ばれた。

(14) 文久二年二月「由緒書」に付載して、次のような元和九年極月晦日付の請取手形の写がある。

本多美濃守様々元和九亥年被下置候御請證之写

銀三貫目御 戸へ納手形壹枚之内、壹貫目者多可郡田高村川なミノ運上、同壹貫目者瀧野ニて米やと仕候運上、同壹貫目者加東郡へ方々出候すミ木万五分一之運上、右手形勘定所へ請取申候、以上

^(元和九)
亥 極月晦日 河村小三郎印

小川喜左衛門印

瀧野

九郎兵衛とのへ

田高村

伝入老

- (15) 「五分一銀取申候荷物ハ、川筋江出申候炭抹香薪惣而山荷物ニ而御座候、先規定り御座候而、忝駄ニ付五分一銀三分、上まへ銀壹分五厘ツ、薪式拾駄積忝艘ニ付五分一銀三匁、上まへ銀三匁、前々々請取、五分一銀半分田高舟座江相渡シ申候御事」(享保十五年五月「千種清右衛門様御代官所加東郡新町村舟持々五分一銀之儀ニ付書付指上申候ニ付御尋被為遊乍恐言上仕候」とある。

- (16) 「田高村ハ内記様御領分ニ罷成申候ニ付、田高川御運上銀并五分一銀御運上共、内記様へ指上、瀧野川御運上銀ハ姫路中斐守様ニ指上申候、夫より御地頭様へ格々ニ上納仕」(享保十五年六月「乍恐口上」とある。

- (17) 延宝七年二月「寛」。

- (18) 「寛永拾壹年戌ノ年々、渡部忠八請被申候」(寛永二十年「口上ル一札之事」とある。

- (19) 「先祖忠八相勤候例ニ而被仰付候由、丑ノ年御普代町人渡部五郎八ニ被仰付候」(宝永四年八月「寛」)。

- (20) (寛永年間) 四月、八兵衛舟捌御用につき申渡並びに請印状(「小野市史」史料編Ⅱ、六六六頁)。

- (21) 註(20)に同じ。

- (22) 寛永二十一年六月「未年分瀧野組納米拂方帳」その他。

- (23) 明治三年の「由緒書」(「小野市史」史料編Ⅱ、六八七頁)に、

一 銀六拾目 八兵衛受所

河湊御運上

とある。

- (24) 粟生船座の成立については、「慶長年中々私由緒御座候而、船捌御運上所ニ被為仰付」(文政七年「乍恐口上」、「小野市史」

史料編Ⅱ、六八三頁〕とあり、また「川並上曾我井村々下来住村迄、上下式里半余之間に出ル御料私領御年貢米者不及申、百姓諸商人荷物何ニ而も舟之上下支配仕候御運上浜ニ被為 仰付、池田武藏守様御墨付御証文被為 下置候」〔明治三年五月「粟生村船捌御運上由緒書上帳」、「小野市史」史料編Ⅱ、六八七頁〕ともあつて、成立を慶長期としているが、史料が共に幕末・明治期のものであるので、不明である。

(25) 明治三年五月「船捌御運上由緒書上帳」〔「小野市史」史料編Ⅱ、六八七頁〕。

(26) 享保十一年九月「差入申一札之事」〔「兵庫県史」史料編、近世四、三七四頁〕。

(27) 「慶安・正徳年中川筋高瀬船一件写」〔「兵庫県史」史料編、近世四、三六一頁〕の内、正徳五年七月「乍恐指上申口上覚」。

(28) 文久二年二月「由緒書」。

(29) 明暦三年十月「乍恐言上」。

(30) 寛文四年と推定される「乍恐書付ヲ以御訴訟申上候御事」には、工事対象に「津万瀧四百間余、野村瀧五百間、黒瀧五拾間、大なめら二舟路を切明」と、「黒瀧五拾間」があり、工事完成時期も「慶長拾壹年十一月迄両瀧其外所々普請出来仕」と、「十一月」としている。

(31) 註(29)に同じ。

(32) 註(14)「請取手形」参照。

(33) 註(29)に同じ。

付記 本稿作成にあたっては、瀧野町・阿江幸子氏、小野市史編纂室長・石野茂三氏に多大の御助力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

(かわな のぼる 本学名誉教授)